

「哀江南賦」にみる庾信の“窮愁”と“招魂”

山崎 まなみ

はじめに

魂兮帰来

魂よ帰り来たれ

哀江南

江南 哀し

〔楚辭〕——「招魂」より

「哀江南賦」に描かれているのは、祖国の滅亡の過程とそれに巻き込まれた作者庾信の不幸な一生である。そして、賦の基調を成すものとして、彼の江南に対する望郷の念が古来注目されてきた。このことは、次の言葉からも窺われる。

信は位望通顯なりと雖も、常に郷関の思有り。乃ち哀江南賦を作りて以て其の意を致すと云ふ。

〔周書〕庾信伝

庾信（字・子山）は南朝梁武帝の天監十二年（五一三）に生まれ、隋文帝の開皇元年（五八一）に没した。その六十九年の生涯のうち後半生は、祖国梁の滅亡に遭い異朝に仕えることを余儀なくされる、という苦渋に満ちたものであった。

彼は故郷を遠く離れた北の地で二十八年の長きを過ごし、多くの作品を詠んでいる。中でも最晩年の「哀江南賦」は、百六句の序文と五百二十八句の本文とから成る長編の賦であり、庾信の代表作として名高い。^{注1}

とは言え、「哀江南賦」は単にノスタルジックな思いが感傷的に綴られた作品ではない。それは、「郷関の思」という言葉で簡単に片付けることのできない作者の複雑な心情によって成り立っている。従って、この賦における彼の創作意識を探ることは、取りも直さず晩年の庾信の文学を理解するための有効な手段の一つとなりうるかと思われる。だが私の見る限りでは、「哀江南賦」の構造や表現を具体的に分析し、総合的に解釈しようとした論文は

まだ現れていないようである。

本稿は、晩年の庾信文学の結晶点としての「哀江南賦」を幾つかの角度から私なりに解釈し、その解釈を通じて、彼の文学世界の一端を明らかにしようとする試みである。特に、題名の「哀江南」の典拠となった『楚辞』「招魂」との関連性に目を向け、庾信にとつての「哀江南賦」の存在意義をこの観点から捉えなおしてみたい。

なお、テキストとしては清・倪璠注の『庾子山集注』を使用し、本文・年譜等はすべてこれに拠る。

一

「哀江南賦」を作った時の庾信の心理状態及び賦の性格については、彼自らが序の中で次のように語っている。

楚歌非取樂之方 楚歌は樂しみを取るの方に非ず

魯酒無忘憂之用 魯酒は憂ひを忘るるの用無し

追為此賦 ふりかへり 追てこの賦を為し

聊以記言 いささ 聊か以て言を記す

不無危苦之辞 危苦の辞無からずとも

惟以悲哀為主 た 惟だ悲哀を以て主と為す

……………

況復舟楫路窮 況^{また}んや復舟楫の路窮し

星漢非乘槎可上 星漢は槎^{いかだ}に乗りて上るべきに非ざるをや

風颺道阻 風颺に道阻まれ

蓬萊無可到之期 蓬萊に到るべきの期無し

窮者欲達其言 窮せる者はその言を達せんと欲し

勞者須歌其事 勞^{つか}れし者は須^{すべから}くその事を歌ふべし

当時の庾信がいわゆる「窮愁^{注2}」の状態にあった、つまり如何ともし難い行き詰まりを感じて苦しんでいたということは、前述の表現や、同時期の他作品の多くの箇所から容易に想像できる。そして、その苦しみはどんな娛樂も慰めとならないほどであった。

かくて「哀江南賦」が作られた、とあり、庾信が歌によっても酒によっても得られない慰めをこの賦に求めていたことが示唆される。また「窮者欲達其言」の一言は、この賦が作者の内部からの強い欲求に迫られて作られたものであることを物語っている。

庾信は他ならぬ自分自身のために「哀江南賦」を作った。そしてその賦の全編を流れているのは「悲哀」感情である。ところでここでひとつ疑問が湧くのだが、彼は果たして滅び去った梁国の「悲哀」を描こうとしたのだろうか、それとも自己の境遇の「悲哀」を描こうとしたのだろうか。その両方だとしても、どちらに重点を置いていたのだろうか。この点に関しては、「哀江南賦」

序にみえる次の一節が手がかりになる。

昔桓君山之志事こころざし 昔桓君山之志事

杜元凱之平生 杜元凱の平生

並有著書 並に著書有り

咸能自序 咸みな自序を能くす

この「自序」という言葉は、自己の立論や著作に対するはしがきというよりは、文字通り「自らを序べた文」を指していると思われる。と言うのは、桓君山（桓譚）は著書『新論』で自分のことを語っているし、杜元凱（杜預）にも「自述」という作品があるからである。（ちなみに、庾信自身は自分の文集にはしがきをつけてはいない^{注3}）。従って、この一節は、庾信が桓譚や杜預に倣って自序伝を書こうとしたことを暗示しているのである。つまり、「哀江南賦」にみられる「悲哀」は庾信その人の「悲哀」に他ならないということになる。小尾郊一氏などもこの賦は庾信の自伝であると断言している^{注4}。

次に韻文における「自序」（あるいは「自叙」）について、少し詳しく見ておくことにする。

まず、唐の劉知幾が屈原の「離騷」を自序伝の祖とみなし、自序というものは己の欠点短所を隠し長所美点を書きたてるものだと主張している^{注5}。また、藤野岩友氏は「離騷」の自序伝としての

特色に「一人称の叙述」・「父祖との関係」・「自己の才徳を揚げる」の三点をあげており、これは武王の病氣平癒を祖神に祈った周公旦の祝辞に基づいたものだとしている^{注6}。すなわち、その特色は「家系を叙し、自己の功績を叙し、神の前へ出るに当って、自己の資格を述べることにあるという。以上のごとき自序伝の特色は、「哀江南賦」にも顕著に現れている。庾信は賦の中で祖先を誇り、己の手柄話や名声を得意気に語り、また自身の行為をことごとく美化しているが、その反面、侯景の乱の際の敵前逃亡のような拭い難い汚点に関しては口がかなり重くなっているのである。こうしたことから、「哀江南賦」は楚辞の流れをくんだ自序性をもつ作品だと推測してもよいのではないか。

自序形式の文学は、我身の不遇に対する嘆きや怨みなどから生ずる場合が多い。たとえば、司馬遷は『史記』の屈原伝において「離騷」を次のように分析している。

離騷とは、猶ほ憂に離あふがごときなり。夫れ天は、人の始めなり、父母は、人の本なり。人窮すれば則ち本に返る、故に勞苦倦極すれば、未だ嘗て天を呼ばずんばあらず（中略）。屈平道を正しくし行ひを直くし、忠を竭くし智を尽くして以てその君に事ふるに、讒人これを聞ず、窮すと謂ふべし。信にして疑はれ、忠にして謗そらる、能く怨むこと無からんや。

屈平の離騷を作る、蓋し怨みより生ぜしなり。

この「離騷」を源流としていわゆる「賢人失志の賦」^{注7}が漢代以降多く現われるのだが、「哀江南賦」における庾信の創作意識も、屈原や後の「賢人」のそれに共通するところがあつたに違いない。すなわち、「窮」した人間が天を呼んで自己救済を求めること、これが自序文学の基本的な一性質であり、「哀江南賦」はこの性質を確かに備えていると思われる。

二

晩年の庾信は確かに「窮」していた。では、彼をそういう状態に陥らせた最大の原因は何だったのであろうか。何故彼は「哀江南賦」で自己を語らなければならなかったのだろうか。

賦の創作動機については、二つの異なった見方がある。陳寅恪氏によると、抑留されていた二十数年の間に庾信が南へ帰るチャンスは度々あつたにもかかわらず、彼はことごとくそれを逸したので、積年の怨みが嵩じて、直接的には沈炯の「帰魂賦」^{注8}に触発されて「哀江南賦」が書かれたのだ、としている。それに対して劉開揚氏は、庾信の失われた祖国・梁に対する思慕の念が彼をして「哀江南賦」を書かしめたのであり、「帰魂賦」の影響はあくまで副次的なものである、としている。^{注9}「帰魂賦」については後

に述べることにして、ここで問題とすべきは庾信の偲ぶ「故郷」とは何か、と言うことである。それは陳氏の言うごとく単に江南の地を指すのか、それとも劉氏のごとく今は亡き梁朝のみが彼の故郷と言えるのであろうか。この点を明らかにするために、梁の後に興った陳に対する庾信の意識を、序文と本文から追ってみることにしよう。

鋤耰棘矜者

鋤耰もて棘矜となす者は

因利乘便

利に因りて便に乗ず

將非江表王氣

はた江表の王氣

終於三百年乎

三百年にして終るに非ざるか

孫權の吳建国から敬帝の梁滅亡まで、その間の西晋の三十七年を除き、建業（建康）に都した王朝の総年数は二百九十八年となる。約三百年続いた江南の王氣が途絶えてしまったのは何故か。それは「寒人」がどさくさに紛れて国を奪ったからだ、と庾信は訴える。彼はここで、陳霸先の梁篡奪を非難しているのだ。陳霸先は低い階層の出であるので庾信は彼を見下し、そのような人物の建てた陳国を南朝の正式な王朝と認めることを拒否している。

用無頼之子弟

無頼の子弟を用て

挙江東而全棄

江東を挙りて全て棄つ

惜天下之一家

惜しむらくは天下の一家

遭東南之反氣 東南の反氣に遭ふ

倪璠や舒宝章は「無頼之子弟」を、また譚正璧は「東南之反

^{注10}

^{注11}

氣」を、それぞれ陳霸先を指したものと見ている。いずれであれ庾信の陳霸先に対する敵対心が読みとれる。このことから察するに、庾信にとっての故郷はやはり梁朝時代の江南に限定されていたのではないか。

ただし、晩年になって南へ帰る望みを断たれたが故に、彼は陳を自分の故郷ではないと思いついで自らを慰めようとした、と考へることも可能である。実際そういう気持ちも多少はあったかも知れない。しかしその場合も、梁朝で榮華をきわめた庾信にとって陳国の臣となることはやはり本意ではなからう。まだ帰南のチャンスがあつた天和三、四年（五六八、九）頃、「送衛王南征」という詩の中で陳国の將を「寇」呼ばわりしていることから、庾信が梁と陳とを明らかに区別していたことがわかる。^{注12} 私はこの点を庾信の自尊心の強さゆえと考える。彼は、若き日の地位や聲望を依然として忘れられずにいた。そのような彼にとって、寒人の建てた陳国は蔑むべき対象とはなつても、決して故郷とはなり得ないのである。

庾信の故郷はもはやこの世のどこにもない。とすると、彼の「郷関の思」は行き場を失い、空しく彼の回りをさまようばかり

となつてしまふ。その様子が次の句によく表わされている。

李陵之双鳧永去 李陵の双鳧永とこしへに去り

蘇武之一雁空飛 蘇武の一雁空しく飛ぶ

蘇武が故郷への手紙をつけて飛ばした雁、その雁が空しく飛ぶのは、目的地が存在しないからである。似たような表現として、ほぼ同時期の作品である「擬連珠」其の四十四にも「白雁の書を抱くも、定めて家の寄すべき無からん」という句がある。故郷に帰れないのではなく、帰る故郷がないのだと、彼自身は認識していたようだ。

故郷を喪失するということは、自己の生きる基盤を奪われてしまったことに通ずる。庾信は、長安で生き長らえながら自らを「故時將軍」と称しているが、自己の生の拠り所をもはや過去にしか求め得ない、という点が彼の「窮愁」の原因の一端となつてゐるに違いない。

庾信に「窮愁」をもたらしたその他の要因として、彼の人生における二つの汚点があげられる。その一つは、侯景の乱の際朱雀門を守りながら、敵の姿を見るや兵を捨てて逃げ出したことである。

俄に景到るに、信衆を帥ひきゐて柝ふなばたを開き、始めて一舶を除くや、景軍の皆鉄面を著つくるを見、退きて門に隠る。信方に甘

蔗を食らはんとするに、飛箭有りて門柱に中り、信の手なる甘蔗、弦に應じて落つ、遂に軍を棄てて走る。

〔資治通鑑〕梁紀十七武帝太清二年〕

庾信は多くの作品を遺したが、この恥すべき行為について触れたものはほとんどない。わずかに「哀江南賦」序において、次のような抽象的な一節が見られるのみである。

將軍一去

將軍一たび去りて

大樹飄零

大樹飄零す

逆に言えば、それだけ彼にとっては苦い思い出なのであろう。

ただし、庾信だけが特別臆病だったわけではなく、当時の南朝の士大夫が総じて平穩な生活に浸りきっていて、戦いに慣れていなかったことをつけ加えておかねばならない。庾信と同時期の文学者顔之推の『顔氏家訓』渉務第一に「梁世の士大夫、侯景の乱に及び、膚脆骨柔にして、行歩に堪へず、体羸氣弱にして、寒暑に耐へず、倉卒として坐死する者、往往にして然り」とあるが、このような状況を考慮した場合、庾信は己の敵前逃亡を恥じてはいたが、倫理的呵責をもったというよりはむしろ自尊心が傷つき、それ故に語ろうとしなかった、と解する方がよいと思われる。

庾信の人生におけるもう一つの汚点とは、言うまでもなく、梁を滅ぼした敵国の西魏、さらにはそれを受け継いだ北周の禄を食

んだ、その変節的行為である。庾信はこのことについて次のように語っている。

讓東海之浜

東海の浜を讓らるるに

遂餐周粟

遂て周粟を餐む

周粟を食むこと、すなわち『史記』等に見える伯夷叔齊の行為とは正反対の行為である。庾信はここでめずらしく自分を貶めているが、その意図はどこにあるのだろう。彼は自分の変節的行為を深く恥じていて、その心情を素直に告白した、とするのが最も自然な解釈かも知れない。しかし、私はそうは思わない。と言うのは、短命な王朝が多かった六朝時代においては、庾信のように二朝以上に仕えることはそれほど特殊なケースではなかったからだ。^{注15} 加えて、前出の顔之推の士大夫批判からもわかるように、当時の社会は庾信が倫理観念を養う条件を満たしていなかったのである。従って、彼が倫理面から深い自己嫌悪に陥ったとは考え難い。ただし、庾信がこの行為について何も感じていないとも思えない。そこで、当時の庾信の心情を推し量ることができそうな詩を一編あげておこう。

對宴齊使

歸軒下賓館

軒を歸すに賓館を下り

送蓋出河堤

蓋を送りて河堤に出づ

酒正離杯促

酒正に離杯促され

歌工別曲悽

歌工の別曲悽たり

林寒木皮厚

林寒くして木皮厚く

沙廻雁飛低

沙廻りて雁飛ぶこと低し

故人儻相訪

故人儻し相訪らば

知余已執珪

余已に珪を執りしを知らん

これは、天和四年（五六九）北齊の国使が北周を訪れ、庾信がその帰還を見送った時に作られた詩である。北齊は禪を受ける前は東魏であった。そして庾信は、梁朝時代に国使として東魏に赴いている。当然知人もいるだろうし、少なくとも彼を見知っている人は大勢いるだろう。そのような国の使に対して、庾信は今度は周の臣として応待しなければならなかった。このことは彼にとって大変な屈辱であったに違いない。倪璠の言うように、彼は「木皮厚」という表現で自分の面の皮の厚さを強調し、最後の二句で「もし齊の知人が私のことを問うたら、彼は私が周に仕えていることを知るだろう」と自らを恥じている。

この詩には、注目すべき点が二つある。一つは、庾信は厚顔無恥の自分を強調するのだが、実はその言葉によって逆に自分は恥を知っているのだと訴えているのではないか、ということだ。二つめは、庾信が自分に対してというよりも、むしろ人に対してこ

の行為を恥じていることである。要するに、彼は道徳的に自分が許せないのではなく、人に嘲られる行為をした自分に耐えられないのだ。庾信が自らを卑下するのは、逆説的にはあるが、傷つきやすい自尊心を守るために必要な作業だったのであり、彼流の自己保身の方法であった、と考えられる。

黙して忘れたふりをするか、自ら嘲笑するかできない庾信の二つの汚点、これらは決して消え去ることなく彼の魂を蝕んでいた。さらに言うならば、自分の人生の行き止まりの死を目前にしたとき、決して戻ることのできない栄光の過去ともいえるべき梁代と、その後の屈辱の後半生との大きなギャップに苦しめられ、庾信は「窮愁」の状態に陥ってしまったのだ。賦と同時期に書かれた「擬詠懷」其の一に「涸魴は常に水を思ふ」とあるが、庾信はまさに水を失って喘ぐ魚であった。自己が本来在るべき場所、その場所を永久に喪失し、宙ぶらりんの状態になってしまった者は、如何にして名誉回復を図ればよいのか。結論から先に言うならば、庾信は「哀江南賦」にそれを託した。失われた自己の存在意義を見つけ出し、それを自他にアピールするために、彼は己の生涯を振り返り、それを言葉にせざるを得なかったのである。

三

「窮」した人間が天を呼んで自己救済を求める、これが「哀江南賦」における創作意識の根底にあることは既に述べた。本節では、賦の表現上の特質を押さえ、それが具体的にどのような形で自己救済につながってくるかを考えてみたい。まず、庾信が賦の中で自己を語っている、その語り口を順に見ていくことにしよう。彼は自己の父祖の紹介から筆を起している。そしてその言葉はおよそ賛辞である。それを最も端的に表しているのは次の句であらう。

家有直道

家に直道有り

人多全節

人多くは節を全うす

訓子見於純深

子を訓みづかひきて純深あらは見れ

事君彰於義烈

君に事つかへて義烈彰らかなり

父祖について述べたあと、庾信は自己の若い頃の地位声望について言い及んでいる。その筆致も幾分の謙遜を含んでいるとは言え、かなり誇らしげである。「笠轂に居りて兵を掌り、蘭池を出て典午たり」という言葉から、当時庾信が軍事を司っていたことがわかるが、この点についても次のような自慢話をしている。

論兵於江漢之君

兵を江漢の君に論じ

拭玉於西河之主 玉を西河の主に拭す

この二句は、庾信が湘東王繹（後の元帝）と水戦の計画をたて反乱者を戦わずして鎮めたことと、国使として東魏に赴いたことを歌ったものであり、侯景の乱が勃発するまでの彼の活躍ぶりが強調される。そして庾信にとって最初の挫折となる朱雀門の敵前逃亡については、前出の如く自己を名將軍馮異に喩え「將軍が去った」という抽象的な表現しかしていない。

侯景軍による台城陥落後、庾信は繹のいる江陵へ奔る。これは彼に限ったことではなく、当時多くの士大夫達が同じように江陵への脱出を図ったようだ。^{注16}然るに庾信はこの行為を、国を救うためと美化している。

鬼同曹社之謀

鬼は曹社の謀に同じく

人有秦庭之哭

人に秦庭の哭有り

後の句は『春秋左氏伝』定公四年の記述にある申包胥の故事に拠っている。申包胥は楚の大夫であり、楚が呉に滅ぼされそうになった時秦に援軍を請うて楚を救った人物である。^{注17}庾信は、自分が申包胥のごとく乞援の志を抱いて江陵へ出向いた、と言いたいのであらう。さらに、西魏が江陵に侵攻する少し前に庾信は国使として西魏を訪れるのだが、この場面でも申包胥の故事が使われている点は大変興味深い。

畏南山之雨

南山の雨を畏るるに

忽踐秦庭

忽ちにして秦庭を踐む

江陵への出奔と国の代表としての敵国訪問という、傍目には似ても似つかぬ行為を、庾信は何故同次元で捉えたのか。この問いに答えてくれるのは、『戦国策』楚策一や『淮南子』脩務訓に見える申包胥の言葉であろう。この二書の中で申包胥は、自分が敵の中に突入して死んだとてたかだか一兵卒、それより逃亡して諸侯に助けを求めた方が得策だ、という意味のことを述べている。^{注18}つまり、申包胥は救国の志を持ちつつ、頻死の祖国を後にしたのである。この申包胥の行為は、庾信にとって有効な免罪符となり得た。彼は、申包胥と自己を同一視することによって江陵への逃避行を救国行為として正当化し、西魏出使をもその延長線上に見たのである。

ただ、実際にはそのような高潔な志に似つかわしくない道中のエピソードも伝わっている。『南史』梁宗室伝によると、庾信は江陵へ向かう途中、昔同性愛の相手だった長沙王韶のもとを訪れるが、彼に冷遇されて腹を立て、食物を踏みつけて大勢の前で韶を罵倒しているのだ。この話から庾信のプライドの高さは十分窺われるが、救国の士の行為には程遠い気がする。

いずれにせよ、庾信は申包胥を媒体として自己の行為を「救国」

の名のもとに昇華させたのだが、西魏出使に関しては、さらに多くの典故を用いて国使庾信像を作りあげている。まず『史記』刺客列伝の荊軻が、庾信の西魏行きの悲壮感を高めるために登場する。ここで、庾信が命を賭して敵国へ出向いて行ったことが強調されるのである。

壯士不還

壯士還らず

寒風蕭瑟^{注19}

寒風蕭瑟たり

しかし、西魏出使中に梁が滅んだため、庾信はそのまま長安に留められてしまう。そして残りの生涯を北地にて過ごすこととなる。決死の覚悟で臨んだとされる彼の政治交渉も、結局は何の益もなかったようだ。このことに関して、庾信は『史記』廉頗・藺相如列伝の藺相如の故事、及び平原君列伝の毛遂の故事を利用して、己の志と交渉の不成功をほのめかしている。

荆璧睨柱

荆璧もて柱を睨むは

受連城而見欺

連城を受けんとして欺さるるがゆゑ

載書横階

書^{きざし}を載きて階を横ぎり

捧珠盤而不定

珠盤を捧げつつも定まらず

このように、賦に見える庾信の軌跡を追っていくと、彼が常に自己を救国の士、すなわち英雄として表現していることがわかる。行き過ぎとも言える彼の英雄志向は、「哀江南賦」の性質を

論じるうえで見落とせない点と言えよう。

申包胥が楚を、藺相如が趙を救ったのに反し、庾信の志は決して成就しない。この点において、庾信の置かれた立場は荆軻のそれに似ている。彼はそのことを強く意識していたのだろう。荆軻の故事は、晩年における「哀江南賦」以外の作品にも多く歌われており、庾信の荆軻に対する思い入れの強さが窺われる。ただし、庾信が荆軻の故事にこだわる背景として、庾信の意識の中で二者にもう一つの共通点が存在したことも見逃せない。それは、主君に恵まれなかった、という点である。

『史記』の記述をもとにして考えるならば、荆軻は「庸人に非ず」であり、それに対して荆軻の仕えた太子丹は器が小さい。太子は守役の鞠武に次のように諫められもしている。

夫れ危ふきを行ひて安きを求めんと欲し、禍を造りて福を求め、計浅くして怨み深し（中略）、此れ所謂「怨に資して禍を助く」なり。

加えて太子は人を疑いやすい。荆軻の失敗については、太子にも幾分かの責任がある。私は、庾信がこのような凡愚な太子と荆軻との関係を、主君である元帝と自分との関係にだぶらせようとしたのではないかと考える。と言うのも、彼は「哀江南賦」の中で、元帝の性格、行動などを容赦なく非難しており、その非難が

前出の鞠武の太子に対する非難によく似ているのである。

登陽城而避險 陽城に登りて險を避け

臥砥柱而求安 砥柱に臥して安を求む

この二句は、元帝が江陵に居続けたことを、険しい山に登って危険を避け、不安定な地で安定を求めているに等しい、と歌ったものだ。

其怨則驢 其の怨則ち驢おろく

其盟則寒 其の盟則ち寒し

庾信の目に、元帝は、軽率な態度によって西魏の怨みを買ひ、祖国が滅ばされて自分が異郷に留められる原因をつくった暗帝、と映っていた。従って彼は、荆軻を才能と志は十分であったのによい主君に巡りあわなかった不幸な壮士として捉え、共感を覚えたのであろう。そして、荆軻の不幸の中に自らを沈みこませることによって慰めを得ようとしていたのではないか。

庾信の元帝批判は前述の四句だけではない。彼は賦の中で、以前の主君である元帝を、三十句以上にも及ぶ辛辣な言葉によって徹底的に攻撃している。その口吻は、たとえば次のごとくである。

沈猜則方遑其欲 猜うたがひを沈ふかくし則ち方に其の欲を遑たぐましくし

藏疾則自矜於己 疾ねたみを藏かくして則ち自ら己に矜ほこる

また、実際に庾信が元帝を恐れていたことを暗示する句もある。

入欹斜之小径

欹斜の小径に入りて

掩蓬藿之荒扉

蓬藿の荒扉を掩ふ

就汀洲之杜若

汀洲の杜若を就け

待蘆葦之单衣

蘆葦の单衣を待たん

侃璠はこの四句を、元帝が疑い深いので庾信は屈原や諸葛恪のように讒を受けることを憂え恐れた、と解釈しており、諸注もそれに倣っている。私もこの解釈は妥当と思う。何故なら、「擬詠懷」其の二十一に「讒を避けて猶ほ葛を采る」という表現があるからだ。ちなみに、「采葛」とは『詩経』王風の篇名であり、使として国外へ出向くことを指すと言われる。前二句が人目を忍ぶ庾信の姿を描いていることも考えあわせると、彼が小人の元帝への讒言を恐れていたことは明らかである。また、本節の始めでみた「南山の雨を恐るるに、忽ちにして秦庭を踐む」という句の「南山」も、元帝を指すとする説が多い。庾信としては、自分の存在を脅かし、自分を異郷に送り出し、さらには自分から愛すべき祖国を永久に奪い去ってしまった元帝に対する怨みは、抑え難いものであったに違いない。

ただし、賦の中の激しい元帝攻撃には意図的な面も多分にあったと考えられる。元帝の非人情さや政治能力の欠如を強調することによって、自身の不幸と、同時に自身の行為の悲壮さがおの

ずと浮かび上がってくるのを、彼はたぶん意識していたのであるう。

自己を被害者として捉える傾向は、西魏に対する彼の言葉からもわかる。庾信は、西魏が梁を滅ぼしたことに關しては、梁の自業自得であり運命である、としてあまり西魏を非難していない。^{注20}

これは、現在世話になっている北周王朝に対する遠慮という外的理由も当然あろうし、また、西魏を非難すると、その後継国の禄を食^はんでいる自己を否定することになってしまうので、彼の中で強い抑制が働いたためと思われる。しかし、自分が抑留されたことと關しては、前述のように藺相如の故事を用いた句で「欺さる」と言っているし、「三年別館に囚^はる」といった表現もある。自分は今北地にいるが、これは自分の意志ではない、強制によるものだ、自分は国を救うために使者として敵国に出向いたが、運悪く欺され、囚われてしまったのだ、というのが庾信の主張したいところであろう。

庾信の高潔なる志は、侯景や元帝・敵国西魏など、さらには梁朝の内部崩壊など、諸々の要因によって成就を阻まれているのだが、視点を広げて見れば、これらはすべて運命のなせるわざである、といった認識が生まれてくる。

嗚呼山岳崩頽

嗚呼山岳の崩れ頽^{ほろ}ぶは

既履危亡之運

既に危亡の運を履く

春秋迭代

春秋迭に代はるに

必有去故之悲

必ず故きを去るの悲しみ有り

天意人事

天意と人事と

可以悽愴傷心者矣

以て悽愴心を傷ましむるべき者なり

ここに見える「危亡の運」「天意」などの言葉から、庾信が運命の存在を強く意識していたことがわかる。そしてこの意識こそが彼の自己救済につながってくるのだ、と私は考える。このことについて、本節でみてきたことをふまえて具体的な説明を試みるならば、次のようになる。

庾信は賦の中で、まず梁朝が平和だった頃の自己の栄光を語る。そうすることによって、己の才徳を確認している。しかし、あの時代は再び戻ってはこない。魂を既に滅んだ梁朝へ飛ばすと、現在の自分を否定することになり、今北周に存在する庾信は抜け殻となってしまう。そこで彼は、梁滅亡の過程とその原因について綿綿と綴ることによって、滅亡は必然的な運命であり、己の力ではどうすることもできなかったのだ、と自分に言い聞かせる。と同時に、そのような運命の中で自分は自分なりに常に志をもって行動すべく努力してきたことを訴える。彼は自らを申包胥や荊軻に喩え、その志を全うできなかったのは不幸な運命のせいだと

考える。そして最後には、運命という人力を越えた大きな存在のもとに身を委ねて、さまよえる自己の魂をとり戻そうとするのである。

清水凱夫氏は、庾信の詩賦の特徴を「悲哀への耽溺」と評しているが、大變的を射た言葉だと思う。庾信にとって己の魂を救う方法は、自ら悲劇の主人公の役割を演ずること以外になかったのだ。すなわち、庾信にとっての「悲哀」は、彼の窮せる魂を救うキーワードだったのである。

四

「哀江南賦」の「哀江南」は、『楚辞』「招魂」の「魂よ帰り来たれ、江南 哀し」という句に拠っている。「招魂」の作者及び被招者が誰であるかについては古来諸説があるが、いずれにせよ、一体に「招魂」は、屈原の「魂」が耐え難い悲しみ故に肉体(魄)を離れ「魂魄離散」の状態になってしまったので、その魂を招きよせるために作られた作品とみなされている。とすると、庾信がこのことを意識して自らの賦の題としたとは言えないだろうか。^{注24} 庾信が自己救済のために「哀江南賦」をなしたことは前節までで述べたが、この行為はすなわち庾信流の「招魂」なのではないだろうか。

ここで、「哀江南賦」の創作を触発したという沈炯の「帰魂賦」にふれ、両者の比較を試みよう。

沈炯は、江陵が西魏に侵攻された際捕虜となって長安に連れ行かれた。彼は南へ帰りたい一心で天に祈り、梁・敬帝の紹泰二年（五五六）帰南を果たす。そのときに作ったのが「帰魂賦」である。沈炯はその序で「周易に帰魂の卦有り、屈原招魂篇を著す、故より魂の帰るべきを知る」と述べており、また賦の前半では主に彼が捕虜として長安へ連れて行かれる道程が描かれている。北地における沈炯の様子は、次の一節のごとくである。

何精靈以堪此

何の精靈以て此に堪へん

乃縦酒以陶憂

乃ち酒を縦にして以て憂を陶く

至誠可以感鬼

至誠は以て鬼をも感ぜしむるべし

秉信可以祈天

信を秉りて以て天に祈るべし

何精殞而魄散

何の精か殞ちて魄散ず

忽魂歸而氣旋

忽ち魂歸りて氣旋る

天への祈りはきかれて沈炯は南へ帰る。賦の後半はその道のりについての記述である。すなわち、沈炯にとっては故郷（梁）へ帰ることが己の魂を取り戻すことであったのだ。この賦はまさに「帰魂」であって、私が言うところの「招魂」とは全く質を異にしている。

一方庾信は故郷喪失者となってしまう。加えて、祖国の敵の禄を食むことに自尊心は傷つき、自らの栄光の過去と現在とのギャップに身が引き裂かれる。庾信の苦しみは沈炯よりもっと深いところにあった。そしてそれは「窮愁」と言うがごとく、出口のない行き詰まりの苦しみであったのだ。彼が賦をなすことによって自らの魂を慰めようとするのは当然である。魂を故郷へ帰すのではなく、行き場のない魂を慰撫し、自己回復を図る。これこそが「招魂」的行為だと言えよう。

『楚辞』『招魂』の大部分を占めるのは巫陽による招辞であり、それは「四方上下の恐るべき神話伝説を挙げて魂を嚇し、さらにさまざまな官能的快楽を列ねて、魂を誘い、その身に復帰せしめようとする」ものである。内容構成の面から見れば、「哀江南賦」は「招魂」とは似ても似つかない。この賦を「招魂」のための招辞としようと、庾信が明確に意図していたわけではないだろう。しかし、江南に帰れない庾信は、江南をさまよう自らの魂に向かって「江南は哀しい」と執拗に訴えかけることによって、確かに「招魂」をしている。突き詰めて言えば、「招魂」の結句は、「哀江南賦」の主題そのものである。形式はどうであれ、庾信はやはり自らの作る「哀江南賦」に、潜在的に「招魂」、すなわち己が魂を招きかえすというモチーフを託していたに違いない。

ない。

私は先に、藤野岩友氏の説をひいて、「哀江南賦」は楚辞の流れをくんだ自序性をもつ作品なのではないか、と述べた。この楚辞と、楚辞から派生して賦のもうひとつの源流となった漢賦について、白川静氏は、そのいずれも言語のもつ呪的機能に依存する、という意味において、なお古代文学的な性格をもつ、とされる。

また楚辞は、不幸を肯定し、それを避けることよりもむしろそれに向かうことを自らの運命とする文学であり、「命ならば則ち幽にも処らん」(「思美人」)「憂を舒べて哀しみを娛しまん」(「懷沙」)と

いうような運命の肯定のうちに、人はかえって絶望から救われ自らを淨め得る、とも言われる。さらには、自己の絶対的な正しさの主張、激情的表現なども楚辞文学を特徴づけるとされている。^{注26}

白川氏のあげられた楚辞文学の特色にのっとって「哀江南賦」を検討するならば、この賦が楚辞の流れを受け継ぐものであることは明らかであろう。そして飛躍を恐れずに言うならば、楚辞系(漢賦系に対して)の賦は、根本的にそれぞれの作者に対して「招魂」の役割を担っており、そういう意味でこれらを「招魂文学」と呼ぶこともできるのではあるまいか。

賦はもともと言霊に訴える文学なのだが、梁朝の宮廷サロンにおいて形骸化した美辞麗句を並べていた頃、庾信がそのことを意

識していたか否かは、はなはだ疑問である。しかし、人生の後半に「窮愁」を強く意識することによって、庾信の賦は賦本来の性格を取り戻した。杜甫が庾信を評して「凌雲の健筆意は縦横なり」(「戯れに六絶句を為る」其の一)と言い、「暮年の詩賦江關を動かす」(「詠懷古跡五首」其の一)と言ったのも、自らの魂を必死で取り戻そうとする庾信の悲痛な叫びを聞きとったからであるのに違いない。

おわりに

庾信は自らの生の終わりを間近に感じ、不本意な生涯を振り返って自尊心がひどく傷つき、窮愁のあまり「魂魄離散」の状態に陥りそうになっていた。そこで、死を前にしてもう一度自らの軌跡を辿り、己の正しさと逃れ難い不幸な運命を訴えて「悲哀」の名のもとに自己回復を期した。こうして作られたのが「哀江南賦」であり、この賦はいわば作者の「招魂」のために生まれたものである。

彼は「運命」によって己の生を清算しようとした。その手段として、不幸を背負った完全無欠なるもうひとりの自分を創り出し、虚構の世界に配置した。すなわち、「哀江南賦」は、庾信という哀しき愛国の士を主人公とした壮大な歴史ドラマであり、そ

のドラマにおいて庾信は、史実を変形させ再構成する劇作家、架空の悲劇を演ずる役者、そしてその劇にカタルシスを求める観客の三役をこなしていることになる。

しかし、庾信は実際に「哀江南賦」によって自らの魂を呼び戻すことが出来たのであろうか。残念ながら、私はこの問いに答える術を持たない。ただ言えることは、賦に登場した申包胥や馮異、蘭相如などの名臣と自らの行動との落差を最も痛切に感じていたのは、他ならぬ庾信自身だったのではないか、ということである。そうであるならば、彼は「離騷」を作った屈原のように己を信じることが出来なかったであろう。庾信は必死で言霊に訴えようとしたが、もしかしたら、返ってきたのはより深い絶望だけだったかもしれない。

注

注1 「哀江南賦」の制作年代は未詳だが、陳寅恪氏が「詠哀江南賦」(清華學報)一三卷一期・一九四一年四月)において、この賦を周武帝宣政元年(五七八)十二月に書かれたものであると推定し、その根拠を述べているので、今はこれに従う。当時庾信は十六歳。

注2 この言葉は庾信の晩年の作品(「園庭」「臥疾窮愁」等)に出てくる。

注3 『庾開府集』に序をつけているのは、庾信と親交のあった北周の滕王道である。

注4 「庾信の人と文学——江南を哀しむ賦」を中心として——(広島大学文学部紀要)二三—三 一九六四年)

注5 劉知幾は『史通』(内篇・序伝)において「屈原離騷經其の首章、上は氏族を陳べ、下は祖考を列す、先に厥の性を述べ、次に名字を顯す。自叙の発跡實に此に基く。」と述べている。

注6 『巫系文学論』(一九五一年)「自序文学——祝辞系文学」と「増補巫系文学論」(一九六九年)「自序伝の性格——楚辭を中心として——」を参考とした。

注7 この言葉は漢の劉歆の「詩賦略」による。「賢人失志の賦」については、中島千秋氏『賦の成立と展開』(一九六三年)に詳しい。

注8 注1の論文に同じ。

注9 「論庾信及其詩賦」(文学遺産増刊)七号 一九五九年)

注10 『庾信選集』(一九八三年)

注11 譚正璧、紀馥華編註『庾信詩賦選』(一九五七年)

注12 「水を望みて初めて陣を横たへ、營を移すも寇未だ降らず。」(「送衛王南征」より)

注13 この句は『後漢書』馮異伝を典拠としている。馮異は後漢の光武帝に仕えた名將軍で、常にひとり樹の下に行んでいたので「大樹將軍」と呼ばれていた。

注14 同じく渉務第十一に、次のような批判もある。

「吾世中の文学の士を見るに、(中略)試みに用ふる有るに及び、多くは堪ふる所無し。承平の世に居りて、喪乱の禍有るを知らず、廟堂の下に処りて、戦陳の急有るを知らず、俸禄の資を保ちて、耕稼の苦有るを知らず、吏民の上に肆にし、勞役の勤有るを知らず、故に以て世に應じて務を経すべきこと難し。」

注15 森三樹三郎氏の『六朝士大夫の精神』（一九八六年）に次のような記述がある。

「前朝の遺臣が新しい王朝にそのまま仕えるという、いわゆる二臣の現象は、この時代としては至極当然なことであり、これに対する道徳的な反省も問題にならなかった。むしろ前朝の恩義に殉ずる者があると、かえって不思議にされた位であった。（中略）顔之推が梁齊周隋の四朝に歴任したことは有名な事実であるが、これは顔之推一人に限ったことではなく、梁の元帝に従って江陵にあった南朝の名士が、みな顔之推と行動を共にしているのである。」（P13）

注16 『陳書』蕭引伝に「侯景の乱に、梁元帝の荊州刺史為るや、朝士は多く往きて之に歸す」とある。ちなみに、庾信の父庾肩吾もまた江陵に逃げのびている。

注17 具体的に言えば、申包胥は秦の朝廷に救援を求めたが聞き入れられなかったので、宮廷前の広場に立つて七日七夜哭き続け、遂に秦王に援軍を出させたのである。

注18 「吾堅を被り鋭を執り、強敵に赴きて死せば、此れ猶ほ一卒のごとき也。諸侯に奔らんには若かず。」（『戦国策』より）

注19 この句の典拠となった荆軻の歌は以下の通り。

風蕭蕭兮易水寒 風は蕭蕭として易水寒し

壯士一去兮不復還 壯士一たび去りて復還らず

注20 庾信は梁滅亡について次のように語っている。

○有南風之不競 南風の競はざる有りて

値西鄰之責言 西鄰の責言に値ふ

○雖借人之外力 人の外力を借ると雖も

實蕭牆之内起 實に蕭牆の内より起こる

注21 「庾信の文学」（『立命館文学』三四八・三四九号 一九七四年）

注22 屈原自招説を最初に唱えたのは司馬遷であり、宋玉が屈原の魂を

招いたとする説については後漢の王逸が始めである。他に、屈原が懷王の魂を招いたとする郭沫若氏の説などもある。

注23 「招魂」に出てくる言葉。魂は精神をつかさどり、魄は肉体をつかさどる。これらは平時には合体しているが、心身が極度に疲労したりその末に死に至ったりすると分離放散してしまう。

注24 興膳宏氏は『庾信』（一九八三年）の中で、『招魂』への連想は、この賦が庾信みずからの魂を鎮めるといふ創作の動機をもつことを思わせる。」と述べている。ただ、この点について具体的に論じている人はまだいないように思われる。

注25 藤野岩友氏（『楚辞』一九六七年）に拠る。

注26 「辞賦文学」（『中国の古代文学』）一九七六年）

（やまさき まなみ 一九八九年日文卒）